

平成30年度末「学校評価実施報告」

1. 「確かな学力」の育成に向けて

(1) 重点目標

教科会を中心とした授業研修の活性化を行う中で、自ら学ぶ・学べる学習環境作りを推進する。

(2) 具体的な取組

- 全教科が「学ぶ意義」「将来性」「身につけたい資質・能力」「魅力」に着目したプレゼンを、全校集会形式（梅津の学び オリエンテーション）で実施する。
- 全員が年間一回以上の研究授業または公開授業を計画・実施し、主体的で対話的な深い学びのある授業の研修を行う。
- 「本時の目標」と「本時のふりかえり」を毎授業確認、記述する。
- 確認プログラムが実施されるごとに、授業担当者が成果と課題を分析する。
- 学習内容の定着に課題のある生徒に対する個別の支援体制を考え実践する。
- 土日の学習時間確保と一週間の学びの定着を目的とし、生徒一人ひとりに自学自習ノートを持たせて、金曜日配布、月曜日回収する自学自習の取組を行う。
- 保護者、家庭に対して学習習慣定着・確立の啓発を目的とした冊子「自学自習を楽しもう」を配布し、家庭への協力依頼を行う。

(3) 年間総括（成果と課題）

指標のひとつである学習確認プログラムの結果は、学年や教科により違いがある。1年生で正答率が多少下降したことは課題である。生徒個々の差が大きく、放課後の補習や個別の指導により、改善を試みたがまだまだ不十分であった。これから学年が進むに従い、応用的な力が必要な内容が多くなり、全体の差が開くことが学習意欲にまで及ぶことが心配であり、いかに「支援」を手厚くできるかが課題となる。

2・3年生は、学校生活の落ち着きと共に、僅かであるが上昇したと思われる。さらに授業改善等の学習指導面の成果が求められる。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

ここ数年の生徒指導面を中心とした取り組みが功を奏し、僅かずつだが3年生の全国調査・学習確認プログラムの数値は上昇を続けている。まずは、生徒との信頼関係構築や生徒指導面の取組を継続した上で、学力向上を第1の目標と掲げ、次年度次のように取り組みたい。

- 授業規律10箇条・聞き方名人・話し方名人のレベルアップ。
- 授業の「めあて(本時の目標)」提示の徹底と、設定についての研修実施。
- 家庭学習に繋がる「ふりかえり」の徹底。
- 自主勉ノートの運用見直し。
- 学習確認プログラムの数値目標の設定。
- 週1回の学力向上委員会の構成と運用の再検討。(来年度は校長も入る)
- 教科会の活性化。教科内の研究授業の実施。
- 校外研修会への積極的な参加奨励。
- 総合学習のテーマ設定や学習内容等の刷新。(カリマネ意識)

また若手・中堅・ベテラン等の年齢層にかかわらず、皆がさらに積極的に授業の工夫や改善に取り組み、成果

を出したい。数値や実感として成果が得られれば、さらなる授業改善の意欲が生まれると思われる。各種調査の前向きな分析と、新学習指導要領の全面实施を前に、本校生徒に付けさせたい資質・能力を下にカリキュラムマネジメントの視点から、再度「主体的・対話的で深い学び」の実践を、学校全体として取り組みたい。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

平成31年3月25日開催

落ち着いた学校での学習の様子について、本校の難しい時期をご存じの方から、高く評価をして頂いた。家庭学習の量や質については、それぞれの家庭の意識や文化のようなものにも要員があり、そう簡単に学校が取り組んでも結果は出ない。息の長い取組が必要とのこと。協力できる事があれば言うて欲しいとのことだった。

2. 「豊かな心」の育成に向けて

(1) 重点目標

落ち着いた学習環境を整え、言語活動を充実させるための「朝読書」をより効果的に定着させ、生徒の心に響く「道徳教育」や、豊かな人間性を育む「人権教育」を実践する。

(2) 具体的な取組

- ・ 読書活動を通して言語能力を高めるため、「朝読書」を小中一貫の一つの柱としても、継続し実践していく。
- ・ 共によりよく生きるために、自他の生き方や価値観の違いを認め合い、その良さを伸ばしつつ、多様性を理解する姿勢をしっかりと身につけてさせる。
- ・ 3年間を見通した本校の人権教育を継続する。学年内で係りを中心に十分な準備を行い、学年の実態に応じた人権教育を行う。
- ・ いじめや暴力などの問題行動に対しては、毅然とした姿勢で指導を徹底する。
- ・ 年3回の全校道徳をさらに深化させ、生徒の意見・感想を引き出し、交流することにより、生徒の心をより深く耕すものとする。
- ・ 生徒会の「梅津の志」徹底への取組を、全面的にバックアップする。

(3) 中間総括（成果と課題）

学校評価アンケートでは、全体的に保護者の評価は上昇しているものが多いが、生徒からの学校評価は逆のものがある。これは「子どもたちの意識の高まり」との分析意見があり、確かに学校生活の様子からは満足感や充実感の向上の方を感じ取れることが多い。しかし保護者の評価は、生徒の意見に左右される部分も多く、保護者評価の上昇は生徒の気持ちを代弁している可能性も高い。

校内では評価を次年度に活かす意味で、それぞれの項目について、評価が下降したことについて総括した。その方向性は、行事予定等の関係で、校内での総括後に行ったクラスマネジメントシートの結果から、正しかったと言える。ただし、このクラスマネジメントシートの結果も、大きな行事直後の成功感や達成感の高い、クラスが最も一つになった直後の10月と3月では、単純に比較できないとの意見もあった。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

次年度は、再度中間総括であげた改善点を推し進める。なかでも、授業時間を重視する。生徒指導課からの「授業で行う生徒指導」のポイント、総合育成支援課からの「ユニバーサルデザインチェック表」の項目、学力向上重点支援校ブロック会議で頂いたご意見を前面に出す。同じ数値や同じ生徒の様子を見ながら、大きく違う分析意見を、次年度の本校の取組にどう活かすのか、年度当初に再度意思統一を行う。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

平成31年3月25日開催

色々な行事が大変充実し、盛り上がって成功裏に終わっているのは間違いないが、その雰囲気について行けな

い生徒や、大勢の中で見逃している生徒や事象がないか、細かな観察をお願いしたい。学校評価アンケート結果は、ここ数年の上昇傾向から、充分満足できる。

3. 「健やかな体」の育成に向けて

(1) 重点目標

食・健康・安全などについての関心を高め、心身の健康の保持促進に対する実践力を養い、また部活動などのスポーツを通して、体力の向上・情緒面の安定、また、知的な発達を促す

(2) 具体的な取組

- 保健教育の充実を図り、基本的な生活習慣確立に向けた指導と支援を行う。
- 「食育だより」を活用することなどを通じて、食育を推進することにより、心と体の調和の取れた成長をはかる。特に、朝食を全員がとれるようにはたらきかける。
- 保健室の意義・目的・利用方法等の指導を通して、自己管理意識を深化させる。
- 朝の健康チェックを通して、日常的な健康観察を徹底し、迅速な対応をする。必要に応じて、家庭や専門機関との連携を図る。
- 日常の安全点検を行い、常に危険を回避できる環境をつくる。
- 定期的に避難訓練を実施し、安全への意識を高める指導を行う。また生活・交通・災害に対する安全教育を充実させる。
- 部活動のガイドラインを遵守し、適切な運用を進める。

(3) 中間評価（成果と課題）

部活動についての満足度が低下している。今年度制定された「部活ガイドライン」によって、量的な部分が減ったためと推測される。運動系の部活は「土日も全日練習」という従前のイメージから抜けられていないように思われる。短い時間でこれまで以上の成果を上げられるような研究と、働き方改革などの趣旨も含めた広報活動が必要。

学校生活においては、精神的なやすらぎを感じ、安全・安心な生活をおくっていると判断できる。とくに、クラスマネジメントシートの「クラスのやすらぎ」項目については、目安スコア100、80～120の範囲なら良好と判断できるところ、大幅に上回っている。とくに学年が上がるに従ってスコアが上がる場所から、学校生活への満足度が分かる。

課題は、家庭での心のやすらぎと、体力テスト結果。各家庭の教育の関心の上昇も感じられるが、全校調査による基本的な生活習慣の低さが長年続く状況は、改善されているとは思えない。体力テストの数値については、数値上昇に絞った授業はできるが、スポーツの楽しさや多くの種目に触れさせることを大切にすると、改善は簡単ではなく、幼少期からの地域や家庭での生活（遊び含む）の影響が大きい。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

部活動については、練習内容の質の追求を科学的に行うことが必要。そのためには、その種目に対する専門的な知識が求められる。部活指導員や外部コーチの積極的な活用が必要となる。

学校生活においては、これからも学校評価やクラスマネジメントシート・いじめ記名式調査などを重視し、生徒の訴えを見逃さない細心の注意が必要。授業時間以外でも、休み時間・放課後に生徒と共に過ごす意識の更なる向上も必要。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

平成31年3月25日開催

不登校の課題に絡め、心身の健康の維持・増進について、改善が必要との意見があった。とくに地域の一人としても、協力できることはしていきたいとのことだった。